

で寿命はあまり変わらないのではないかという点
が、次第に明らかになりつつある。今後精度をさ
らに高めるための調査を続行する予定である。

体の大きさについて、外見上からは、金華山の
サルは、同緯度内陸部のサルに比べて明らかに小
さい。しかし、どの位小さいかは、捕獲調査が現
段階では不可能なので調べる手段がなかった。幸
い金華山のサルでは、収集した46頭分の骨格標
本がある。一方内陸のサルでは、猿害によって射
殺され埋められた死体のあることが判明し、今年
度オトナのオス3体を発掘した。今後、7体はな
んとか発掘し、比較調査する予定である。

金華山のサルの生態学的特性に直接的に関係し
ているにちがいないサルの食物という観点からの森
林の生産量についても、シード・トラップ法等を
用いて継続してデータを収集中である。

計画：3-1

ニホンザルのコドモのけんかに見られる社会的
状況と第3者に対する認識

浜井美弥（財団法人日本モンキーセンター）

平成5年7月7日～13日、10月20日～2
8日の2回、地獄谷野猿公苑（長野県）において
フィールド調査を行い、志賀A1群のニホンザル
が餌場にいるときに起こったけんかの音声を録音
し、同時にそのけんかの勝敗、攻撃の程度、特に
コドモが関わった場合は親など周囲の血縁個体の
反応を記録した。実際に身体接触を伴うような攻
撃を受けている間に発している悲鳴と、その後、
周囲にアピールするように派手に鳴きだしている
音声は異なっており、現在、特に後者の音声の長
さや頻度について、その母親の順位や周囲の状況
との関わりを分析している。また、高順位家系の
コドモは、攻撃を受けていないような状況でも悲
鳴のような声をあげることがあり、そのときの音
声は、アピールする音声と威嚇の入り交じったも
のであった。

計画：4-1

社会的ネットワークをもとにした霊長類の社会
構造の種間比較

広谷 浩子（神奈川県立博物館）

霊長類は様々な大きさのグループを持ち、社会

構造多岐に及んでいる。この多様性を簡単な指数
で表し、脳の構造をはじめとする形態の進化や生
態学条件と関連づけて調べることは霊長類社会の
進化を解明するために重要である。本研究は、誰
が誰とつきあうかという社会的ネットワークに着
目して、ネットワークの大きさや密度、形、性別
による参加様式の違い等を定量化し、各種および
各属の社会性を表す指数を得ることを目的とする。
グループ飼育されているさまざまな種を対象にグ
ルーミングのネットワークを記録した。それと共
に文献からのデータもととりあげ分析した。

今回は*Macaca*を中心に観察及びデータ解析を
行った。加えて、それ以外のオナガザル科の種や
新世界ザルについても予備的観察を行った。結果
は以下のとおりである。

1) *Macaca*のデータ解析

グルーミングの行われた dyad の総数や各個体
にとつてのグルーミング相手数の群れ平均をグルー
プサイズに対してプロットした。ボンネットモン
キーやチベットモンキーではグループサイズが大
きくなると、これらの値はニホンザルに比べてか
なり急な上昇を示した。ニホンザルとボンネット
モンキー・チベットモンキーとのコントラストは、
グルーミング相手数における性差でも認められた。
ニホンザルでは相手数がオス>メスになっている
のに対し、ボンネットモンキー・チベットモンキー
ではメス>オスであった。このような傾向が
*Macaca*内の社会変異とどう関連するのか興味深い。

2) *Macaca*以外の種の予備的観察

社会関係の種間比較にとってグルーミングが必
ずしも適当な行動とは限らない。たとえば、リス
ザルは*Macaca*同様に複雄群をつくるが、観察中
にグルーミングをほとんど行わず、尾を肩にかつ
いで体を接触させてすわることが、重要な親和的
行動のひとつであった。社会性の尺度としてどの
行動を選ぶかは、広範な種間比較をする際に検討
すべき重大な問題であろう。

計画：4-2

動物社会の変異及び定量化に関する研究

広谷 彰（京都大学霊長類研究所）

脳構造の進化にともない個体認知能力が増し、
これが動物の社会性の進化に影響したという仮説
にもとづき、いくつかの種間比較研究がおこなわ